

四——おわりに

十日市場駅から調査地域に向う途中の農家の庭に一本の樺が聳えている。畠田川沿いの農地のはずれにあり、地域のシンボルツリーとして、どの位の地点から眺められるか、川沿いの斜面、坂道から

注意すると良く見える。調査中にランドマークの選定などを話合ったが、この樺には気がつかず、意見の大半は建造物を選んだ。例えば、ゴルフ場のネットやデザインの奇抜な建物だった。自然が多く、共生していた時代の寺社の塔や火の見やぐらが地域のシンボルと考えられた頃の残滓である。自然が失わ

れて行くことに危機感をもつなら、せめて地域のシンボルとして、自然公園とか、永い年月を生きて来た樹木を選び大切にしたいと考えている。最後に、ここに報告した調査は「まちづくりウォーキング」（つづじが丘小学校区域のケーススタディ）として、まためたものを、緑区カルテ研究会の手で刊

行されたものである。調査及びまとめにあたって協力して頂いた緑区カルテ研究会の方、緑区・斉藤恒樹、山県稔生、教育委員会事務局・越智二郎、市民局・丸山由利子氏の尽力によったことを附記し感謝したい。△横浜市建築カウンセラー・緑区在住▽

②市民の手による環境マップづくり

村田和夫

横浜ボランティア協会では、創立以来、家庭、学校を含めた地域社会と青少年との関係を追求してきた。そして、「地域に開かれた学校づくり」の提言や「青少年のためのボランティア活動」の推進を行ってきた。そこで一九八二年度は、「子どもの幸せのために私たちは地域で何をすべきか」をテーマに掲げ、その一環として、青少年をとりまく環境問題に取り組みため、「青少年を育む地域

の風土づくりモデル地区」として綱島地区を指定したのであった。ところで、青少年をとりまく環境の見直しを図るための「環境マップづくり」は、一九八三年六月現在、既に一四地区（各区一カ所）で、青少年指導員が中心になって行われてきた。しかし、行政の環境浄化事業として行われているため、依頼された青少年指導員の努力にもかかわらず、他の青少年指導者はもとより住

民には知られていない。つまり、地図という形をつくることに限定され、地域全体への問題提起や調査活動を通じての青少年関係者の組織化、活用による運動の広がりにまで至っていないのが現状である。唯一、中区第六地区では、環境調査報告書としてまとめられ、地域の教育論議の資料として活用されているのが特筆される。

青少年の育成という、きわめて住民の参加と協力が依拠する活動においては、特に新しい発想をもった行政的対応が求められている。それは、予算通りに事業を無事執行すれば事足れりとするのではなく、事業にかかわる住民の参加意識の高揚、事業のプロセスを通じての組織化、地域住民への問題提起を、市民が主体的に行うように促すものでなければならぬ。つまり主体はあくまで市民であって、行政はその調整役（コーディネイタ

- 一 綱島地区の都市現象が進む
- 二 学校と地域・行政と民間の連携プレー
- 三 市民の手による環境マップづくり
- 四 地域に開かれた運営体制をめざす
- 五 身近な地域環境の新しい発見に驚く
- 六 「育て、綱島の青少年」委員会が発足
- 七 横浜で中学生による浮浪者暴行事件
- 八 青少年問題は都市の病理現象である

青少年の育成という、きわめて住民の参加と協力が依拠する活動においては、特に新しい発想をもった行政的対応が求められている。それは、予算通りに事業を無事執行すれば事足れりとするのではなく、事業にかかわる住民の参加意識の高揚、事業のプロセスを通じての組織化、地域住民への問題提起を、市民が主体的に行うように促すものでなければならぬ。つまり主体はあくまで市民であって、行政はその調整役（コーディネイタ

1)に徹するという発想である。

そこで、本稿では、行政・学校・地域住民組織と横浜ボランティア協会とが連携して、「青少年をとりまく環境調査報告書(環境マップを含む)」を作成した。網島地区環境調査実行委員会の経過と内容を紹介し、行政と住民との関係、まちづくりと青少年問題との関係を考察してみることにする。

一 網島地区の都市化現象が進む

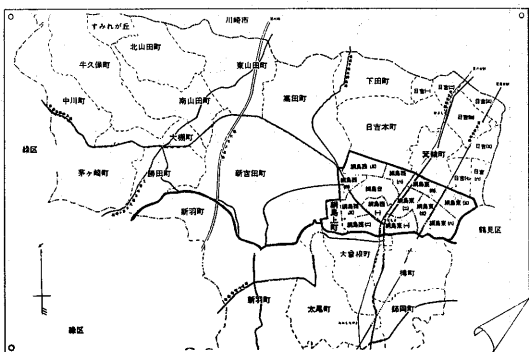
網島地区は港北区のほぼ中央東部に位置し、東は鶴見区駒岡町、西は新吉田町、南は鶴見川を隔てて大曾根町・榎町、北は日吉本町、箕輪町に隣接する。面積二・六五平方キロメートル、人口約二万七〇〇〇人(五月一日現在)の町である。町は東横線によつて東西に分かれ、東と西とは環境の基盤が異なるため、その特色も異なっている。網島駅周辺は、港北区第一の繁華街で、縦横に狭い道路が交差し、迷路のような複雑な街並みを形成している。そして西地区は、旧来の温泉街を中心に発展し、最近鶴見川寄りにマンション、ビル、商店街が乱立しつつある商業地域である。そのため、青少年にとつての環境が悪化している地域である。それに対して東地区は中

小工場が点在する中で、ある程度ゆつたりした町並みの新興住宅地である。しかし、青少年の遊び場は少ない。

町内組織は一四の自治会に分かれ、約八、五〇〇世帯の住民が住んでいる。新旧住民が混在する割には、自治会や商店会の祭りや行事活動が活発で、住民の参加も多い。いわゆる下町的な人情味のある地域である。そのため、地域のほとんどの子どもが加入している子供会の中に、各種スポーツクラブ六団体、文化クラブ二団体などが、地域の有志(ボランティア)の指導で活発に活動している。

地区内には三つの小学校があるが中学

調査地域(港北区網島地区)



校はない。小学生は約二、五〇〇人、そのうち三小学校に通っているのは約一、一〇〇人である。

二 学校と地域・行政と民間の連携プレー

横浜ボランティア協会がモデル地区として網島を指定した理由は、いわゆる都市化現象が進み青少年をとりまく環境が悪化しつつある地域であり、いくつかの候補地域の中で、最も事業目的にかなうと判断したからである。さらに重要なことは、横浜ボランティア協会の会員が多く、住民同士が協会を通じて結びあつており、趣旨を理解すれば進んで活動しようとする主体が存在したからである。

そこで、港北区役所が港北区青少年指導員協議会に計り、網島を「青少年をとりまく環境マップづくりモデル地区」として決定した情報が得られたので、共催して事業を推進する提案を行った。それは、一九八二年五月のことだった。とかくタテ割り行政として非難されるように、同じような目的をもつた事業が、別々に行われがちであるので、できるだけ共同事業として進めたからである。実はそれ以前から、社会福祉の分野で、「福祉の風土づくりモデル地区事業」の話が耳に入っていたので、教育と福祉の

総合的事業として共催することを、港北区社会福祉協議会にも提案していたが、それは体制が整っていないという理由で実現できなかった。

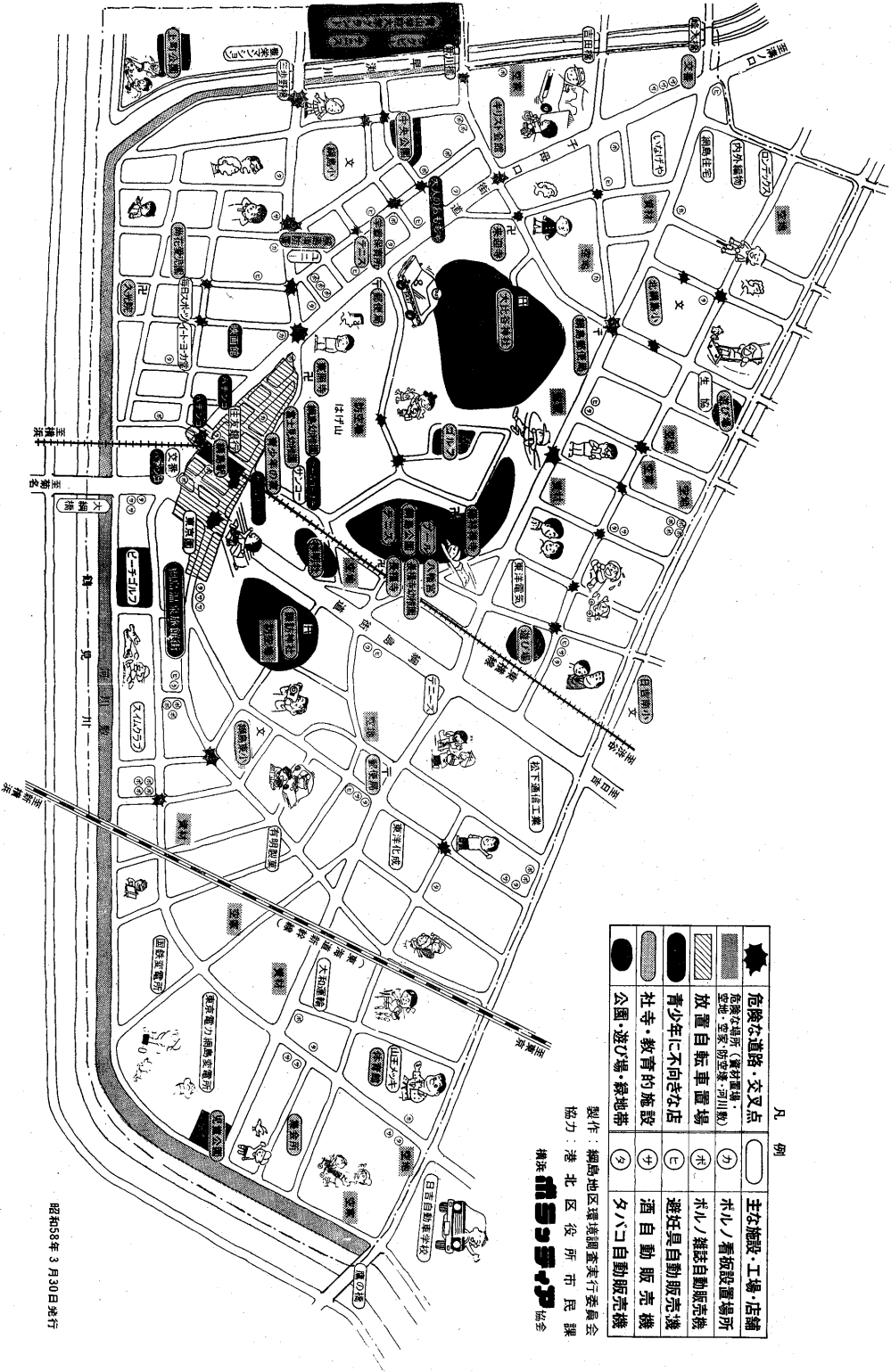
ともあれ、直ちに横浜ボランティア協会と港北区役所、港北区青少年指導員協議会の代表による三者協議会が実現したのであった。そして、より広く青少年育成に携わる地域の団体、学校関係者、住民の方々に呼びかけて、地域住民が主体となつて活動できる実行委員会を構成しようということになり、準備会が開催されたのであった。

実行委員会の構成は、網島地区の青少年指導員協議会・体育指導員協議会、民生(児童)委員協議会、子供会育成者連絡協議会、網島小学校・同PTA、網島東小・同PTA、北網島小・同PTAであった。そして共催団体として、横浜ボランティア協会と港北区役所が加わつた。実行委員会の組織化の過程では横浜ボランティア協会が中心となつてコーディネートしたのが、その後は、実行委員会が主体となつて推進することになる。

三 市民の手による環境マップづくり

そして、実行委員会が作成した事業計画は、次のようなものであった。

綱島地区青少年をとりまく環境マップ



凡例	
★	危険な道路・交叉点
■	危険な場所(糞尿溜溜、空地、空き家、河川敷)
▨	放置自転車置場
●	青少年に不向きな店
○	社寺・教育的施設
○	公園・遊び場・緑地帯
○	主な施設・工場・店舗
○	ホルノ看察設置場所
○	ホルノ雑踏自動販売機
○	遊玩具自動販売機
○	酒自動販売機
○	タバコ自動販売機

製作：綱島地区環境調査実行委員会
 協力：港北区役所市民課
 横浜 **ポロカッパ** 横浜総会

昭和58年 3月30日発行

●内容 網島地区の青少年をとりまく環境について、成長要因（青少年健全育成要素）と阻害要因（非行化、有害環境要素）が、どこにどれだけあるかを調査する（環境調査）。

地域の環境が青少年にどのような影響を与えているか。また、そうした環境の中で網島の青少年は毎日どのように過ごしているかを、学校の協力を得てアンケート調査する（生活調査）。

「環境調査」と「生活調査」の結果を報告書にまとめて問題点を明らかにするとともに、環境地図を作成する。

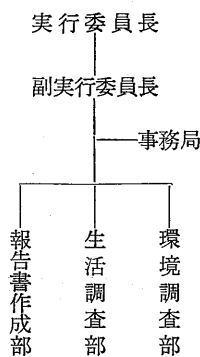
そして、地域住民が、問題の解決のために何ができるかを考えながら、青少年を健全に育成しようとする意識を高めることを目的とする。

●方法 「環境調査」は地区を四ブロック（子供会組織単位）に分け、調査項目ごとにチェックしながら、現場写真をとる、地図上に位置を記入していく。子供会育成が中心となり、八月に実施する。

「生活調査」は網島地区にある三小学校の全校児童約二、一〇〇人を対象に、各クラスごとにアンケート調査する。調査は学校の先生が、集計はPTA役員が中心となり、十月に実施する。

「報告書・環境マップ」は、青少年指導員、体育指導委員、民生（児童）委員が中心となり、一九八三年二月までに作

成する。
△組織図▽



四 地域に開かれた運営体制をめざす

こうしてスタートした「網島地区環境調査実行委員会」は、実にきめ細やかな活動を展開して、『育て／網島の青少年』というタイトルで今年三月、環境マップを付録とした。青少年をとりまく環境調査報告書にまとめあげたのだった。そこに至る道のりを、経過を追って列挙すると次のようなものだった。

- 6/8 三者協議会
- 6/15 網島地区環境調査実行委員会準備会
- 6/24 事業計画企画委員会
- 7/16 第一回実行委員会
- 7/26 地区総会（説明会）
- 8月 環境調査部会
- 9/9 環境調査活動実施
- 9/21 生活調査部会①
- 生活調査部会②

10月 生活調査（アンケート）実施

- 10/5 第二回実行委員会
- 11/8 報告書・環境マップ作成部会①
- 12/1 報告書・環境マップ作成部会②
- 12/2 生活調査部会③
- 12/8 生活調査部会④
- 12/13 報告書・環境マップ作成部会③
- 83年
- 2/18 報告書・環境マップ作成部会④
- 3月 『育て／網島の青少年』発行
- 4/12 第三回実行委員会
- 5/13 地区総会（報告会）

こうした経過の中で注目すべきことは、地区総会を開催し、広く住民に説明したり、報告したりして情報を提供し、理解を求めていくという、開かれた運営体制にしていることである。また、とかく対立しがちな学校と地域住民が協力して、地域に開かれた学校づくりを共に行っていることである。

五 身近な地域環境の新しい発見に驚く

以上のような経過で発行された報告書は、B5判三六ページとA2版の環境マップにまとめられた。内容の詳細は実物を参照していただくとして、ここでは調査によって新しく発見できた、主な内容にとどめることにする。

① 危険な環境があまにも多い

「青少年はこんな所で遊んでいる」の章では、青少年は整備された遊び場ではほとんど遊んでおらず、自宅付近の道路、資材置場、川の土手といった、いわゆる危険な場所ですそかに遊んでいるだけだった。町で青少年を見かける場所はスパーのゲームコーナーで、ほとんどの青少年は塾に通っているか、自宅でテレビを見ているかしていることがわかった。

「こんな所に危険がひそんでいる」の章では、付録の環境マップに、赤で危険な交差点が示されているが、交差点のほとんど、川の土手のすべてが危険箇所であることがわかった。その他、防空壕跡地、工事現場なども危険箇所としてあげられている。

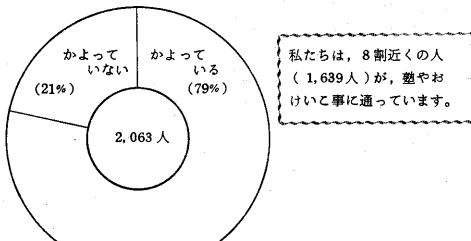
「青少年に不向きなもの」の章では、パチンコ店やポルノ雑誌販売機などが、

青少年に不向きな店と販売機数

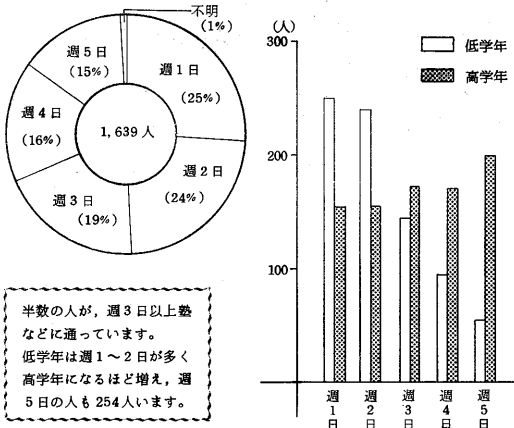
	東地区	西地区	計
ポルノ映画館	—	1	1
ポルノ看板	5	5	10
大人のおもちゃ	—	2	2
パチンコ店	1	2	3
ゲームコーナー	1	2	3
避妊具	3	7	10
ポルノ雑誌	14	16	30
酒	10	26	36
タバコ	7	19	26

(1) 生活全般について

あなたは、じょくやおけいご事にかよっていますか



かよっている人は、週に何日通っていますか



生活全般については、おけいご事や塾に通っている小学生は全体の八割にのぼる。そのうち半数の者が週三日以上通っているのがわかった。

また、三一八人(一五%)の小学生が、自転車に乗っていたり、歩いたりしている時に、交通事故にあったことがあることもわかった。

② 網島の青少年二、〇六三人に聞きました

表のようにたくさん存在していることがわかった。これらは、環境マップにも記され、どこにどれだけあるかわかるようになっていいる。

遊びについては、ほとんど(八六%)の小学生がゲームセンターのある場所を知っており、そのうち、一人または子ども同士で行ったことのある者は半数であった。その時一回三〇〇円以上使う者が二〇%の一七〇人もいた。

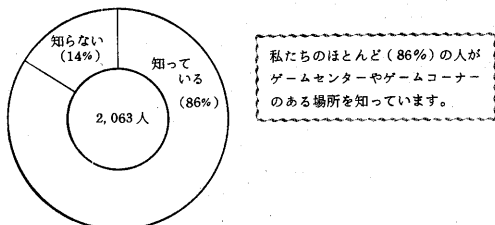
地域活動への参加では、町内のお祭りや催し物には、八割以上の小学生が参加しているが、地域の団体、クラブや町の清掃活動には、ほとんど参加していないことがわかった。

ほしい遊び場では、アスレチックが一番だった。また、安心して遊べる道路、木登りや探険のできる森や山、広いグラウンドなどを希望する小学生が多かった。

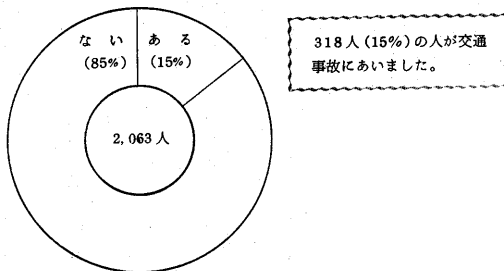
遊びについては、ほとんど(八六%)の小学生がゲームセンターのある場所を知っており、そのうち、一人または子ども同士で行ったことのある者は半数であった。その時一回三〇〇円以上使う者が二〇%の一七〇人もいた。

(2) 遊びについて

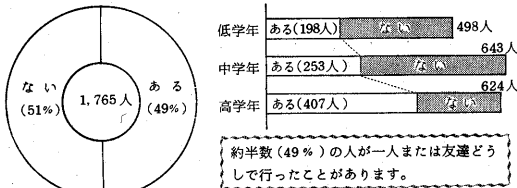
あなたは、ゲームセンター(コーナー)のある所を知っていますか



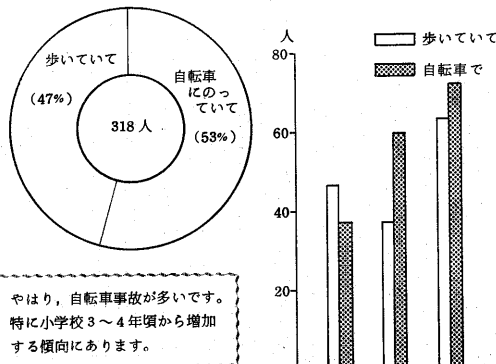
あなたは、交通事故にあったことがありますか



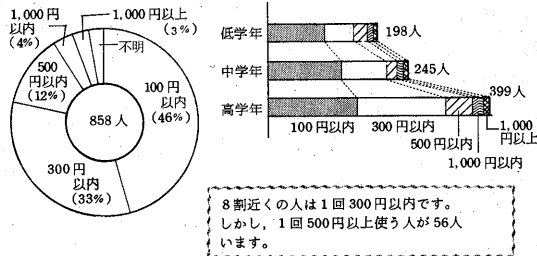
知っている人は、一人または友達といったことがありますか



ある人は、つぎのどの場合ですか

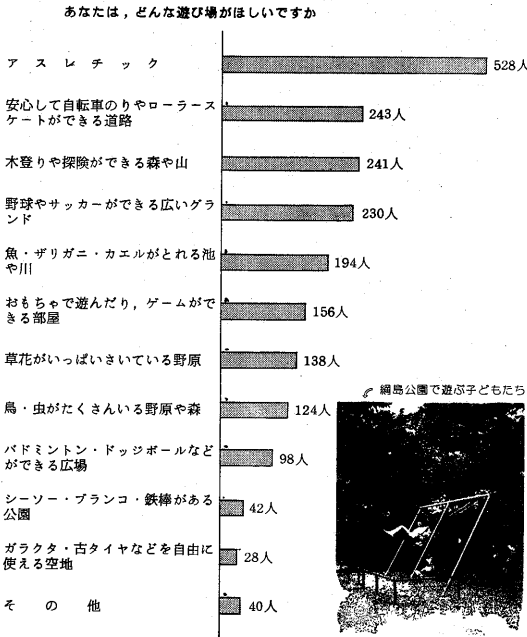


一人または友達といった時、一回いくら使いますか



やはり、自転車事故が多いです。特に小学校3~4年頃から増加する傾向にあります。

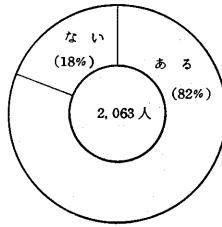
(4) 遊び場



私たちは、遊び場として、アスレチックを希望しています。

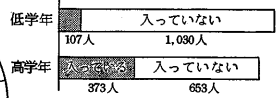
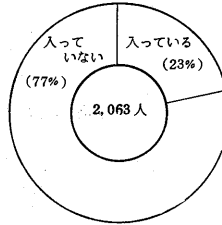
(3) 地域活動への参加

あなたは、町のおまつりや催し物に参加したことがありますか



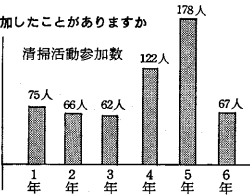
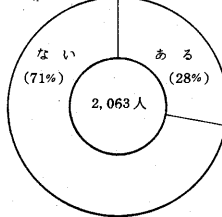
私たちのほとんどの人(1,695人=80%)が、町のおまつりや催し物に参加したことがあります。

あなたは、地域の団体やクラブに入っていますか



私たちは地域の団体やクラブには、あまり入っていません。2,063人中480人(23%)です。

あなたは、町の清掃活動などに参加したことがありますか



私たちは町の清掃活動に積極的には参加していません。570人(28%)です。

六 「育て／網島の青少年」
委員会が発足

こうして、第一段階の調査活動は、一九八二年五月から一九八三年の五月まで、実に一年の歳月をかけて終了した。今、『育て／網島の青少年』は、地域の財産として、住民の間で共有され始めている。

この調査に携わった市民の声は、編集後記にこうしるされている。

★ この報告書は、一五〇人も地域住民の力によって作り上げることができ

もちろん、青少年にとってのよい環境についても調査され、環境マップには公園・遊び場、緑地などが緑色でしるされている。しかし、相対的に緑は少なく、危険を示す赤色で塗られている箇所が多くなっている。

ところで、報告書には、以上のような調査結果の他に、「わが町つなしま」と題して、二万年前からの網島の歴史が、地域の婦人グループの手で執筆されている。また「網島便利帳」として、地区内の主な施設の連絡先が表になっており、どこにあるかが環境マップにもしるされている。さらに、「青少年のためのボランティア活動例」も載っており、市民のための地域活動の手引ともなっている。

こうした声の高まりによって、今年五月の地区総会の席上で新たな出発の確認がなされた。それは、調査委員会はどこでいったん解散するが、調査で得られた問題点を地域の共通課題として、具体的な行動をめざす「育て／網島の青少年」委員会を新たに発足させようという発展的内容であった。そして、中学校の教師やPTAにも参加を求め、小中学校の連携を図るとともに、中学生も含めた青年問題にも取り組むという画期的なものだった。また、ここで知り合った三小学校PTAが、校外での青少年活動などで学

ました。皆、地域をよくしたいという願いから、仕事の合間を利用したボランティア活動でした。不十分な箇所があると何度も足を運んで調べ直した人もありました。こうした苦勞の跡がこの報告書にはおさめられています。

★ この調査活動を通じて、地区の三つの小学校と地域住民組織、そしてPTAが連携できたことはすばらしいことです。とかくかわばり意識によって排斥しがちな学校・家庭・地域が足並みをそろえなければ、青少年を健全に育成することはできません。

★ 調査して終わるのではなく、この報告書を活用して、地域住民の力で改善できることは実現していこうではありませんか。

ひ合ったり、協力し合ったりする行動を展開しようというものであった。

網島の町の環境は悪化しつつあるが、網島の町の住民は再生しつつある。今後の活動に注目するとともに、他地域でも身近な環境を見直し、環境マップづくりを通して、地域を自分たちのものにしていく活動に取り組まれるよう期待する。

その場合、行政や民間団体の果たすべき役割は大きい。住民の声なき声を代弁し、孤立している住民組織を結びつけ、それらを強固にしていくという接着剤としての役割である。接着剤そのものは目に見えないが、一つ一つの部品が機能するためには、なくてはならないものである。

行政と住民との関係は、網島の環境マップづくりの中でくり返し述べてきたので、その事業運営の方法そのものを考察に代えて、最後に、地域環境と青少年との関係を述べて結論とする。

七 横浜で中学生による

浮浪者暴行事件

網島地区での環境調査が、まとまろうとしていた一九八三年一月中旬から二月上旬にかけて横浜市区内の公園や地下街で、寝込みの中の浮浪者が学生風のグループに襲われ、殴られるの暴行を受け、

死者三人を出す事件が連続八件も発生した。そして二月十二日に逮捕された犯人グループは、実は市内の中学生だとわかり、教育関係者にショックを与えたのであった。この事件は、家庭や学校で落ちこぼれ、疎外されている生徒が、自分たち以上に社会的に疎外されている浮浪者を面白半分にいじめ殺すという、きわめて陰湿なものだっただけに、家庭・学校・地域社会のあり方に大きな問題を投げかけたのであった。

こうして、青少年の非行・暴力事件が身近で起こって初めて、関係者はその対策をどうするかと考え始める。しかも、その問題の受けとめ方は、きわめて皮相的なものだった。いわく、「親がしっかりしてないからだ」「落ちこぼれをつくっている学校が悪いからだ」等々。このように、家庭教育や学校教育のあり方にその原因を求めれば、あたかも青少年問題は解決するかのように錯覚しがちである。そのため、大人の側は、青少年の管理・指導を強化しようという結論で落ちつくことになる。だが、そこには青少年という主体が欠落しているので、再びその逆を受けることになり、悪循環を繰り返すのである。

八 青少年問題は都市の

病理現象である

こうして、「親よ、教師よ、しっかりせよ」という大合唱の声は響きわたるが、観客である青少年はそっぽを向くという、あのしらけた舞台を展開するのである。青少年の身になって考えてみる必要があるのではないだろうか。遊び場がないのに遊べと言われ、危険な道路を安全に通れと言われ、差別があるのに差別はいけないと教えられ、自然がないのに自然を大切にすることを教えられているようなものである。

いったい、遊び場や自然を奪ったのは誰なのか。危険な道路や差別のある社会をつくったのは誰なのか。青少年から言わせれば、「世のすべての大人たちよ、しっかりせよ」ということなのである。大人と青少年とは、「しっかりせよ」の内容が違うのである。

もちろん、家庭や学校の教育のあり方に問題がないわけではない。しかし、青年期にはいった段階では、青少年の行動範囲は広がり、家庭や学校以外から、有形・無形の影響を受けて生活しているのである。すなわち、家庭や学校は、青少年をとりまく環境の一つにすぎないのである。

浮浪者を襲撃した中学生は南区内のゲームセンターにたむろしていたと聞く。言うなれば、彼らにとってはゲームセンターが教育の場だったのである。

急激な都市化の中で、青少年が健全に遊んだり、集団活動をしたりする自然や施設が奪われた青少年は、自らの欲求を何に求めたらよいのだろうか。「青少年の非行化は、実は私たち大人が無意識のうちに進めてきた町づくりのあり方に大いに問題があったのではないか」という反省を抜きにした議論は、親や教師に責任を転嫁する傍観者の評論か、自覚を持ってすべて解決すると説く精神論にすぎない。すなわち、青少年の非行は都市のもつ病理の一つであり、親や教師だけがしっかりしても解決できない現象なのである。私たちは、もつと本質的な場所

に解剖のメスを入れなければならない。それは、都市のもつ教育機能はどうなっているかという観点であり、そこから青少年問題をとらえていくという新しい発想である。

そういう意味で、網島地区での取り組みは、今後の青少年活動に新しい一石を投じた試みとして、市民全体に共有されねばならないものだろう。

※ なお本稿は、網島地区環境調査実行委員会の実行委員長である吉原有さんの協力を得て執筆をしました。

△横浜ボランティア協会講師▽